

令和元年度 上伊那圏域地域自立支援協議会議事録

|                            |   |                               |      |         |    |                        |
|----------------------------|---|-------------------------------|------|---------|----|------------------------|
| 会議                         | 部会名   | 第 1 回 療育等連絡会                  | 参加者数 | 43<br>人 | 会場 | 伊那市福祉まちづくりセンター<br>大会議室 |
|                            | 日時  | 令和元年8月26日(月)<br>16:00 ~ 17:30 |      |         |    |                        |
| 主<br>テ<br>ー<br>マ           | <ul style="list-style-type: none"> <li>・自己紹介</li> <li>・今年度の療育等連絡会の目的について</li> <li>・地域分析についての説明</li> <li>・Q-SACCSの記入方法についての説明</li> <li>・グループワーク</li> <li>・その他</li> </ul>   |                               |      |         |    |                        |
| 主<br>な<br>意<br>見<br>な<br>ど | <p>1 自己紹介</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・県 次世代サポート課 青少年指導主事 飯沼祥彦氏<br/>発達障がい支援策に対して所管・発達障がいサポートマネージャー事業の担当もしている。発達障がい者支援対策協議会の話題で発達障がい支援の連携について話題に出るが、全てのライフステージ、そして職種についても教育・医療・就労・保健・医療、全ての分野がかかわっていかないといけないと言われている。面的支援が必要であり、特に地域ごとにおける体制づくりが必要。</li> <li>・県 精神保健センター 精神保健専門員 山口博幸氏<br/>療育部会には、昨年二回参加した。精神保健センターでは、3年に一度県内の支援サービスはどういったものがあるのかまとめてハンドブックを作っている。昨年、発達障害者支援センターの全国大会で長野県の状況を発表することになり、改めて調査を行った。すると、年齢の小さい就学前から義務教育まではわりあいの市町村も同じような支援サービスがあるが、高校へ進学すると急にサービスがなくなるということが改めて分かった。長野県は広く、全国でも4番目の面積であり、市町村の数も全国で2番目。各地域いろんな特色がある。10圏域の中でも50万人規模の長野県域から3万人をきる木曾圏域まで様々ある。各地域により、小さければサービスが行き届いていないかというところと全然そうではなく、きめ細やかに入っているところもある。それぞれ強み、弱みがあるが、その部分は発達障がい支援と同じで、ちょっと弱い部分は強みでカバーしていくこともできると思っている。各圏域、現状がどうなのかということ支援に関わる皆さんで知っておいてもらいたいし、県としても把握してバックアップしていきたい。</li> <li>・伊那保健福祉事務所 健康づくり支援課保健師 倉田明子氏<br/>県の事業としては、発達障害診療地域連絡会を毎年行っていて、講演会と研修を支援者の皆さんと一緒に開催している。そういった会の中で、途切れない連携、支援体制の整備が課題となってきている。課題について一緒に勉強していきたい。</li> <li>・昭和伊南病院 発達障がい診療拠点病院担当医師 鈴木敏洋氏<br/>昨年度から事例検討の担当病院となっている、今回初めての参加で勉強するつもりで参加していきたい。</li> </ul> <p>2 今年度の療育等連絡会の目的について(塩入会長)</p> <p>市町村内でのつながり方はなんとなくわかってきたが、他の市町村の状況などわからない。支援体制の見える化を行い、上伊那圏域の支援力向上を目指す。<br/>分析や支援体制の構築を進めて異動の多い職種の連携も引き継いだ後もつながるようにしていくものにしていきたい。</p> <p>3 Q-SACCSの記入方法についての説明(事務局)</p> <p>途切れない支援は難しく、市町村の枠は別に教育や医療など複雑に絡み合っている。今回分析することのベースになっている考え方として、信州大学医学部の本田先生が行った研究である「発達障害児とその家族に対する地域特性に応じた継続的な支援の実施と評価」があり、発達障害情報・支援センターウェブサイトでもみられるものとなっている。</p> <p>地域分析とは、「幼児期・学童期・思春期・成人期などのライフステージごとに、発達障がいの把握を起点として専門的な支援をどのようにつながっていくかを見える形にし、自治体の支援体制が整備され機能しているところと課題がのこるところを確認・分析する」ものである。</p> <p>地域支援システム整備の原則として、①支援が必要な全ての子供の発達と保護者の子育てを支援するものであること、②総合的であり、ライフステージに沿って一貫性と継続的を持って提供されるものであること、③関連機関は各々が得意な領域に特化し、相互補完的に連携すること、④行政は、公民の役割分担の明確化と基幹昨日の適正配置を行い、責任をもってシステムを運用することが必要とされている。</p> <p>上伊那の人口割合は「小規模市」「小規模町村」に該当する。0～18歳の支援ニーズは、0～18歳の人口の内、潜在ニーズ(診断がつくつかつかないかグレーゾーンの方)は10%いると言われている。推測値として3000人程度はいると思われる。そのうち顕在的ニーズ(診断がつく・手帳の対象となる方)は6%と言われていて、1800名程度と推測される。これらは想定の話ではあるが、いると思って対策を考えていく必要がある。</p> <p>本田先生の提言より小規模市町村に必要なこととして、一つがハードウェア(発達支援室)の設置。ソフトウェアでは、定型的情報、フォーマットを活用する見えるシステムの構築(上伊那成長ダイアリーなど)、組織的連携機能(部局横断組織の設置)が必要と提言されている。</p> <p>また、市町村の機能の整理が必要で、発達障がいを含む支援ニーズ10%に対応する仕組みづくりとも提言されている。岡山県では県全体でこの提言に基づき、トータルライフ支援プロジェクトという事業を実施している、実施した</p> |                               |      |         |    |                        |

|     |   |
|-----|---|
|     | <p>結果として活用効果がいくつかでてきている。①市町村の事業の目的が明確になり、見直しのきっかけにもなる②自治体自前の機能と民間や県への協力事業の内容を確認できる③課題が明確になることでPDCAが導入しやすい④インターフェイスの明確化⑤各市町村の仕組みの特色を互いに共有し、自分の自治体に活かすという5つの効果があった。</p> <p>自治体は自分たちが機能強化すること、自治体だけでは難しいところをどうするかなどを明確化できたり、人が変わっても引継ぎやすくなったり、つなぎは片手間ではないことを明らかにしていく。それぞれの市町村の得手不得手をを知り、他市町村の取り組みも知り、ヒントをもらっていくことが活用効果としてあげられる。この活用効果から岡山県では情報連携に関するガイドラインを作成し、運用を始めている。</p> <p>発達障害者支援法の一部を改正する法律があり、そこで家庭と教育と福祉の連携をとるトライアングルプロジェクトをするよう法律で定められている。このプロジェクトも本日行う取り組みに関連していると考えてほしい。長野県次世代サポート課が取りまとめた調査により、県内中卒生20,000人ほどの中から家居が100人、高校中退600人、高卒後その他が800人、通信制中退100人、通信卒後家居が300人、計2000人がどこにもつながっていない。「途切れのない支援を」と言われて何年もたっているが、現状でも2000人がどこにもつながっていない状況をみて長期的・全体的な視点で支援体制をみていくことが必要と言われている。</p> <p>地域分析の主な流れは①Q-SACCSを用いての支援体制の状況の見える化、②市町村向けの分析に関わるアンケートの実施の2つを並行して行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>•Q-SACCSの見方<br/>縦軸→地域精神保健の3階層 横軸→時間軸。<br/>□枠→「支援の場」 ○枠→継時的インターフェイス・共時的インターフェイス</li> </ul> <p>よくある体制図に「連携」と書いてあるが矢印で表されている部分の実際の中身をどうやっているのか？という部分を明確にする。自治体で行っている事業か、外部に委託する事業なのか、なども記号で統一です。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>•グループワーク<br/>8市町村毎にグループで分かれて、実際にシートにそれぞれ書き込む作業を行った。</li> </ul> |
| まとめ | <p>今後については事務局より、市町村窓口担当へQ-SACCSと取組状況調査票のExcelデータを送付。<br/>Q-SACCSと取組状況調査票を市町村ごとりとまとめ記入したものを9月17日(火)提出。</p>   |
| 次回  | <p>次回は10月2日に実施。内容はグループワークと取組状況調査票を基に本田先生よりSVをいただく。</p>  |